

## 古墳時代鉄器生産の展開

内 田 真 雄

古墳時代の研究において、鉄器にかかわる諸事象の解明は、国家の成立過程などを研究する上での重要課題である。鉄をめぐる研究は、鉄器それ自体の研究の他に、鉄器の生産体制や流通論、所有関係など様々な視点からのアプローチがある。本論では、鉄器生産に関連する遺物から古墳時代の鉄器生産の展開について考えた。具体的には、鍛冶遺構・鍛冶関連遺物の検討や、製品である鉄器自体から、鍛冶技術の発展と展開について検討した。本論で扱った古墳時代の鉄器資料は、生業に関わる農具、工具である。これらの大部分は副葬品であるため、鉄器の持つ属性と資料的な限界も考慮した。

第1章では、鍛冶遺跡から鉄器製作技術やその展開を考えた。分析の対象となる、鉄滓、鍛造剥片、粘土粒などの鍛冶関連遺物について、現在の研究状況についてまとめ、その中でも鍛冶遺跡において普遍的に見ることのできる鞆羽口を通して、鉄器生産の展開について考えた。羽口の分類にあたっては、野島永氏の研究成果を援用しつつ、その後の資料などを加味して整理した。その結果、古墳時代前期に出土する断面蒲鉾形の羽口は、奈良県纏向遺跡をはじめ、拠点的な位置を占める集落からの出土が認められること、また共伴する鍛冶関連遺物から鍛冶技術が完成されたものであることを確認した。この羽口と同時期に出現し、古墳時代中期に盛行するものに、先端部から基部にむけて、「ハ」字状に広がる羽口があるが、これは畿内を中心に分布が認められ、地方では拠点的な集落に見られることがわかった。またより完成した形態である円筒形の羽口は、大県遺跡など畿内の鍛冶専門集落で認められることが確認できた。古墳時代中期に盛行する高杯脚部転用の羽口は、

関東地方や九州などで確認できる一方、一部畿内にも存在している。羽口からは、畿内の專業鍛冶集団に伴うものと、転用羽口の利用による地方の鉄器生産の様子が確認できた。鍛冶遺構・遺物からは、5世紀代の鍛冶技術の拡散がわかる。古墳時代の後期については、專業的な鍛冶集落が盛行するが、中期に見られる小規模な鍛冶遺跡は少なくなる。さて、古墳時代の中期の鍛冶遺跡では、鉄器とともに滑石製模造品など祭祀関係の遺物の出土が認められるが、これらの遺跡には、渡来人の影響が想定できる遺跡があり注意したい。

第2章では、古墳出土の鉄器を検討した。副葬品のもつ意味については、副葬することを目的として製作された、副葬用鉄器の存在について、特に古墳時代前期から中期の鉄器資料について取り上げた。具体的には、副葬段階、鉄器組成、鉄器自体の分析をとおして、葬送儀礼における鉄器の役割、属性について考えた。その結果、前期古墳では、初現期の古墳から統一された古墳祭祀にのっとり、副葬されていることが想定でき、特に鉄器の器種をそろえることに意が注がれていたことが確認できた。前期古墳の鉄器の中では、短冊形鉄斧について、その分布、形態的特徴を分析し、畿内を中心に分布するものについては、首長墳を象徴する鉄器の一つであることを改めて確認し、その製作技術も高度であることを指摘した。古墳に副葬することを目的として製作した副葬用鉄器については奈良県メスリ山古墳の副塚への多量埋納を契機として、中期古墳で盛行する。中期古墳では、多種多量の鉄器の副葬・埋納を行った陪塚を中心に、多量埋納について考え、中期古墳を代表する鉄器の一つとして、また、鍛冶の技術段階の検討材料として、曲刃鎌とU字形クワ・スキ先の出現を検討した。この結果、古墳時代中期以前は、必ずしも出土鉄器が鍛冶の実態を示していないことを再確認した。鍛冶道具埋納古墳や鍛冶遺物の副葬、渡来系集団についても一部検討した。

副葬品の分析からは、前期古墳と中期の鉄器多量埋納は、器種構成などで共通するが、後期からは、鉄器副葬に変化が認められ、中期から後期に画期

が認められる。なお、技術的な進歩は、農具ではU字形クワ・スキ先の出現に象徴される。鍛冶遺跡の分析からは、古墳時代前期は高度な技術を持った集団が拠点的に生産していたが、中期には鍛冶技術の広がりが認められる。中期から認められる韓半島系の土器を伴う鍛冶遺跡や、模造品の副葬などは、半島の鍛冶集団の存在を窺わせる。中期の鍛冶技術の広がりに関して渡来系の集団の役割も大きかったと考える。古墳時代後期には円筒形羽口の出現や、大規模鍛冶遺跡など生産の集約化が行われたことがわかる。